

修士論文要旨（平成二十七年）

平成二十七年に提出された修士論文は、文学研究科国文学専攻一編、同研究科文化財史科学専攻十五編、同研究科地理学専攻一編、社会学研究科社会学専攻（臨床心理学コース）五編の、合わせて二十二編である。
各論文の要旨を次に掲載する。

文学研究科 国文学専攻

《修士論文要旨》

種田山頭火論

本論文は、種田山頭火の俳句表現について考察したものである。山頭火の『行乞記』や『三八九日記』、『四国遍路記』を参考に、俳句雑誌『層雲』から確認された俳句表現を中心に、彼の師である荻原井泉水の文学表現と比較しつつ、それが山頭火に及ぼした影響について論述したものである。

俳句は従来、一句を単体とする文学表現と捉えられ、評釈、研究が為されてきた。しかし、自由律俳句の拠点になった雑誌『層雲』の主宰者荻原井泉水と、その弟子である種田山頭火らの作品には、定型俳句とは異質、すなわち複数の句同士を映像作品におけるフィルムのように時系列順に並べ、連続する一つの文学世界を造形する意識が存在している。本論は如上の自由律俳句の特質をめぐって論述した。

まず第一章で、大正初年次の俳句雑誌『層雲』における同人活動、すなわち荻原井泉水・秋山秋紅蓼・種田山頭火の自由律俳句の創作を通して、俳句表現に対する思想の相違について調査、及び論証を行った。第二章では、先の第一章において指摘した山頭火の創作活動の特

*
小 松 春 菜

徴を踏まえた上で、自由律俳句の表現として未熟な部分の残っていた彼の俳句表現が、大正十五年前後を転期として大きく変化した事実について、句集『草木塔』を視野に入れて考察した。そして、この時期に創作が転換した内的要因の一つと考えられる山頭火の生活環境の変化、及び彼の家庭についても追跡した。

第三章では山頭火の研究上欠かせない荻原井泉水の文学に対する考えや俳句表現について研究する必要があると考え、『井泉水句集』（第一巻・第二巻）、井泉水が編集刊行した尾崎放哉遺稿集『大空』、俳句雑誌『層雲』を対象として調査を進めた。その結果、『井泉水句集』をはじめとする三冊の句集と『層雲』誌上の一部からは、彼が理想とした「無季無形」による、「心身の律（心身の動き）」を、自由律俳句という形式で表現する事例が確認された。このような実証的な営為によって、井泉水によって創造された俳句世界が、山頭火における自由律俳句の成立に影響を及ぼした事が明らかとなった。

第四章では、山頭火の手記に書かれた自由律俳句を対象として、そ

こから確認される俳句表現と日記の記述を精査し、日記の中に確認される山頭火のありのままの生活や旅の様子、心の動きを追った。

以上のような論考を通じて、荻原井泉水の文学表現における理論や実作が種田山頭火に与えた影響は大きいこと、そして山頭火の自由律俳句から確認される彼独自の俳句表現、すなわち連作意識を解明した。だが、今後に残された課題がある。より厳密な手記の読解、俳句雑誌『層雲』誌上における俳句や評論の通読などを通して、種田山頭火をはじめとする自由律の俳人達に対する更なる研究が必要である。